

聖路加看護学会

ニュースレター

第21回聖路加看護学会学術大会開催にあたって 第21回聖路加看護学会学術大会ご案内
 聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金採択者報告 平成27年度学術交流会報告
 理事長挨拶 お知らせ 編集後記

●第21回聖路加看護学会学術大会開催にあたって

第21回学術大会 大会長 吉田 俊子 (宮城大学看護学部 教授・学部長)

第21回聖路加看護学会学術大会は、『「多元的ケア」をつくる・つなぐ～看護の可能性』をテーマに開催することとなりました。

現在の医療は、高度化複雑化し多職種連携で行われております。多職種でのテーブルディスカッションを行い、よりよいケアにつなげていくには、対象理解を共有し、専門的な看護支援を説明し行っていく力が求められます。また医療は、予防期から終末期の連続性の中で様々な場において展開されており、どのように看護をつないでいくのかは重要な課題となっております。学際的な視点から看護を捉えて、看護支援を考えていくことは、これらの課題解決への大きな力になると思います。また、考え方の多様性を知ることは、新たな看護を作り出す鍵となるといえます。

平成26年に出された日本学術会議 健康・生活科学委員会看護学分科会提言「ケアの時代を先導する若手看護学研究者の育成」においても、関連分野との連携・融合による多元的なケアの理念と、その具現化する理論や方法論の開発が不可欠であると述べられています。

今回の学術大会では「多元的ケア」に焦点をあて、多職種連携、様々な場で行われている医療の中で、看護をどのように作りだしていくか、つないでいくかを皆様と考える機会にしたいと思います。

看護職、医療職、関連職種、学生の皆様、多くの方々のご参加を心よりお待ちしております。

●第21回聖路加看護学会学術大会ご案内

会 期：2016年9月17日(土)
 会 場：聖路加国際大学本館(東京都中央区明石町10-1)
 テーマ：「多元的ケア」をつくる・つなぐ～看護の可能性

◆プログラム

【会長講演】

「多元的ケア」をつくる・つなぐ～看護の可能性

演者：吉田 俊子 (宮城大学)
 座長：亀井 智子 (聖路加国際大学)

【基調講演】

「世界を変える『看護』の力(グローバルヘルスにおける新しい挑戦)」

演者：杉下 智彦 (国際協力機構)
 座長：吉田 俊子 (宮城大学)

【教育講演】

「多元的ケアの重要性」(仮)

演者：太田 喜久子 (慶應義塾大学)
 座長：井部 俊子 (聖路加国際大学)

【シンポジウム】

「多元的ケアをどのように作り、地域につなげていくか」(仮)

座長：山田 雅子 (聖路加国際大学)
 大森 純子 (東北大学大学院)
 演者：宇都宮 明美 (聖路加国際大学)
 佐藤 大介 (宮城大学)
 竹谷 洋子 (青森県立中央病院)
 中村 めぐみ (聖路加国際大学教育センター)

【ランチョンセミナー】

【一般演題】口演、示説

【卒業研究発表】

演題申込については、HPをご確認ください。

(<http://plaza.umin.ac.jp/slnr21/>)

演題締切：2016年5月31日(火) 正午

◆参加費 ※事前申込は、2016年8月31日(水)までです。

学 会 員 ￥5,000 (当日参加 ￥6,000)

非学会員 ￥6,000 (当日参加 ￥7,000)

学 生 (当日申込のみ、￥3,000) 当日学生証をご提示ください

◆振込先

郵便振替口座：02290-8-120311

フリガナ：ダイニジュウイッカイセイロカカンゴカクカイガクジュツタイカイ

加入者名：第21回聖路加看護学会学術大会

◆領収書

郵便振替票をもって、領収書にかえさせていただきます。

◆お問合せ先

第21回聖路加看護学会学術大会事務局

〒981-3298 宮城県黒川郡大和町学苑1-1

宮城大学看護学部 吉田研究室

E-mail アドレス：slnr21@myu.ac.jp

聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金 採択者報告

2014年度の聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金「研究助成」は3名の方が採択され、第20回学術大会にて、その成果が発表されました。本号では、改めて採択者の皆さんに、学術大会の報告を含め、研究の動機、実施において難しかった点、成果を得たときの喜びなどを書いていただきました。

ダウン症候群児の家族、看護学生、専門職が協働した体験

一ダウン症候群児の育成プログラムの実施を通して一

有田 美和（筑波大学附属病院遺伝診療部）

2014年度に聖路加看護学会看護実践科学研究助成を受け、「ダウン症候群児の家族、看護学生、専門職が協働した体験—ダウン症候群児の育成プログラムの実施を通して—」というテーマで研究を行いました。

2010年より看護学生が都内のダウン症候群等先天性疾患親の会と協働関係を築き、2012年に「ダウン症候群児、親、看護学生がともに活動を行う会」が発足し活動を行ってきました。会の活動は、「People-Centered Care」の概念に基づき、当事者にとってのよりよい地域の育成環境を検討する話し合いと、育成プログラムの企画・実施をし、ダウン症候群児および家族、保健医療関係者、保育関係者、教育関係者、看護学生、専門職が協働してきました。ダウン症候群児の親の体験が先行研究で明らかにされた一方で、看護学生や専門職の体験はどのようなものであったのか。会に関わってきた1人として、双方の体験を知ることが今後の協働への道しるべになるのではないかと考えたことが今回の研究の出発点でした。

ダウン症候群の人にとってより暮らしやすい地域づくりに貢献するパートナーシップの基礎資料を得るために、本研究では、会の構成メンバーである①ダウン症候群児の家族、②看護学生、③育成プログラムを実施した専門職が、協働して会の運営や企画に取り組んできたことに対し感じ考えたことや、会の活動を通して自身が変化したことや得たものを明らかにすることを目的としました。結果から、互いが学び合い、会の活動を内省し協働を評価することにより、地域社会においてダウン症候群児がよりよく育成し理解を得るための具体的な方法を考えるという体験を共有していることが明らかになりました。協働する各々の立場は異なっても、児がよりよく育成するために同じ目標を共有し協働することが、児を育む地域社会への活動に繋がっていくことを感じました。また、このような協働は、健康に関する様々な課題をもつ人々においても、地域社会のなかで課題を共有し学び合うことにより、当事者にとって暮らしやすい社会を築くことに繋がると感じています。今後、このような活動が筑波においても広げていくことができるように努めたいと考えています。

最後になりましたが、今回学会から本助成を頂きましたことに、深謝いたします。

産科救急チームトレーニング評価におけるパフォーマンス測定尺度の開発

五十嵐ゆかり（聖路加国際大学 看護学部 子どもと家族の看護領域）

2014年度に「産科救急チームトレーニング評価におけるパフォーマンス測定尺度の開発」というテーマで研究助成を受けました。この尺度を作成するに至った経緯は、シミュレーションを用いたプログラムのアウトカム評価において、パフォーマンスを測定する信頼性の高い尺度がなかったことにあります。既存の研究では、Francenら（2012）が用いた「Clinical Teamwork Scale (CTS)」、Williamsら（2013）の「Mayo High Performance Teamwork Scale」の2件のみが使用されているパフォーマンスの測定尺度でした。これらを医療環境が異なる日本で適用するには検討が必要であること、さらに日本語での測定尺度が存在しなかったこと、が本研究に挑戦する目的となりました。

尺度の開発は、以下の3段階で行いました。まず、1. プログラムの目標に沿って、「パフォーマンス評価チェックリスト」の原案（14項目）を作成。その後、2. 評価者間の信頼性の評価と内容修正として、「パフォーマンス評価チェックリスト」のパイロットテスト①を実施しました。評価者は臨床経験3年以上の助産師5名に依頼し、級内相関係数

(Intraclass Correlation Coefficient: ICC) を算出したところ、ICC (2,4) = 0.882でした。また、評価得点の一致度が低い項目の詳細を分析し、内容を修正しました。そして、3. 尺度の信頼性の再評価と再構成として、修正後の「パフォーマンス評価チェックリスト」を用い、パイロットテスト②を実施。ICC (2,2) = 0.954であったため、尺度の信頼性は得られていると判断しました。最終的な「パフォーマンス評価チェックリスト」の構成は「出血時の初期対応」5項目、「出血性ショックのアセスメントと対応」4項目、「輸血時の対応」1項目、「産科DICのアセスメントと対応」2項目、「出血原因の探索」4項目に加え、「産婦とのコミュニケーション」に関する1項目で、合計17項目となりました。

産科救急チームトレーニングのプログラムは、対象の臨床経験に合わせたプログラムも検討し、現在も開発を継続しています。今回作成した評価尺度の精選を重ねるとともに、今後も産科救急の対応に貢献できるシミュレーショントレーニングプログラムを作成していきたいと思えます。最後になりましたが、研究を前進させる機会を下さった本助成に心から感謝致します。

初任期養護教諭が成長する経験とは

三森 寧子（聖路加国際大学 看護学部
保健医療福祉連携における看護領域）

2014年度に聖路加看護学会看護実践科学研究助成金をいただき、初任期養護教諭が成長する経験について研究を行いました。養護教諭は学校教育法において「児童の養護をつかさどる」と定義されているのみであり、同じ名称で従事しているにもかかわらず、その実態は養護教諭一人ひとりがさまざまな考え方のもとで多様な実践をしているのが現状であり課題です。それは、教育学部や看護学部、栄養学部など多様な学問を基盤とした養成機関で養成されていることと、ほとんどの学校で一人職種であるため、仕事について具体的に教えられることがないまま、自分一人の判断や考え方で学校保健活動を展開しなくてはならない職務の特徴があることが大きく関係しています。一人で配属された新人養護教諭は、看護師のプリセプターのような同職種の先輩がいない中で、どのように学び、成長していけばよいのかという問いのもと、どのような経験が養護教諭として成長させるのか、その経験と要因を明らかにすることを目的としました。そして、初任期（3～5年目くらいまで）を経た経験年数4～6年目の現職養護教諭6名の研究参加者に、これまでどのような経験や学びをしながら自らが養護教諭として成長してきたのか、インタビューをさせていただきました。

結果としてわかったことは、まず新人養護教諭として着任したときは、大学で知識や技術を学んでも、前任者より引き継ぎを受けていても、実際の仕事のイメージがわかず、何をしたらよいかわからないという漠然とした不安を抱えていることでした。しかし、日々の実践を重ねていく中で、養護教諭としての仕事がスムーズに出来るようになるといった能力的に成長する経験と学校組織において教職員等と関係性を構築できるようになり、養護教諭としてのアイデンティティを獲得していくといった精神的に成長する経験をしていました。そして、その成長には、養護教諭自身の内省や探究する姿勢と養護教諭を取り巻く組織体制などの環境が関連しており、養護教諭個人だけではなく学校組織全体のあり方も重要であることがわかりました。

今回、一人一人の養護教諭の先生ご自身の養護教諭人生を振り返る語りを聞かせていただいたことで、私自身の経験知の言語化にもなり、養護教諭のあり方について多くの示唆をいただきました。また、教員はまさしく「省察的实践家」であることを確認し、たとえ一人職種であっても組織の一員であること、専門職として内省することを忘れずに、専門性を発揮できる養護教諭を養成しなくてはならないという養成教育における課題も与えられました。本助成をいただき、このような意義のある研究に取り組むことが出来たことを心より感謝申し上げます。

平成27年度学術交流会報告

① 本年度の学術交流会を終えて

2015年9月19日(土) 16:30-17:50、聖路加国際大学本館301教室にて学術交流会が行われ、23名が参加した。本年は認定遺伝カウンセラーの青木美紀子さんを講師に迎え「看護職者のための遺伝の基礎知識：家族歴聴取からわかること」をテーマに講演をしていた。近年、遺伝医療に関する話題を目にする機会が増え、特にアメリカの女優アンジェリーナ・ジョリーが遺伝子検査結果から癌の発症予防のために両乳房の手術を受けたことを公表したニュースは医療界だけでなく一般の人にも遺伝医療を知るきっかけを与えた。専門職である私たちが遺伝医療の現状とそこで看護職が果たす役割を理解するための知識を整理する場として開催した今回の交流会では、多くの参加者から「難しいテーマであったがわかりやすく、看護の役割を理解することができた」と満足度の高いものとなった。

② 講演「看護職者のための遺伝の基礎知識：家族歴聴取からわかること」

講師：青木美紀子（聖路加国際大学 遺伝看護学准教授／聖路加国際病院 遺伝診療部認定遺伝カウンセラー）

青木先生は卒論をきっかけに遺伝への興味を持ち、東京大学で博士号を取得後、現在も研究を続ける一方で認定遺伝カウンセラーとして活躍している。遺伝カウンセリングは「原則的に生涯変化しない、その個体が生来的に保有する遺伝情報（生殖細胞系列）」に関連する疾病がその対象となる。この情報の特殊性のひとつとして「予測性」、つまり将来の健康状態を事前に知ることができる可能性があることがあげられ、青木先生はこれに関するカウンセリングが遺伝医療には必要なのであると説明する。たとえ疾患に関して対処法がない場合でもカウンセリングによってそのクライアントがどのように生活していくべきかをサポートできるのである。

また、遺伝カウンセリングは結果ではなくプロセスであり、それを実践するためのガイドラインもすでに日本医学会が作成している。単なる心理的カウンセリングではなく、遺伝に関わる疾患の正しい知識を情報提供し心理社会的支援を行い、クライアントがその影響を正しく理解し、適応していくプロセスをサポートするのが遺伝カウンセラーの役割となるのである。

その実際の活動については家系図の活用が紹介された。アンジェリーナ・ジョリーのニュースで「遺伝医療のスタートは遺伝子検査」というイメージが強かったが、青木先生はその大切なスタートは日々看護師も行っている家族歴の聴取からできる家系図の作成であると説明した。家系図を描く過程は、それを作るのが目的ではなくクライアントやその家族とともに治療や予後に関わる意思決定の情報を整理するものであり、なによりクライアントとともに遺伝医療にかかわる情報収集の場になるのである。その作成には最低三世代

情報が必要であり、つまり自分祖父母の兄弟姉妹の病歴知っているか、などクライアントの持っている情報がいかに重要かが理解できた。また、その記号も単純な○や■だけではなく、複雑性に富んでいた。

今回、聴講した誰もが遺伝医療に看護師が重要な役割を果たす時代が来たことを実感し、家に帰ったらすぐに自分の家系図を書いてみようという気持ちになった（と感じた）今回の学術交流会となった。

（学術交流委員会：高井今日子）



Lobby

第21回学術大会テーマ「多元的ケアをつくる・つなぐ」の関連情報

第21回聖路加看護学会学術大会では「多元的ケアをつくる・つなぐ」がテーマです。平成26年の日本学術会議 健康・生活科学委員会看護学分科会の「ケアの時代を先導する若手看護学研究者の育成」¹⁾では、「現代の医療には、人々の生活や環境を包括的にとらえ、医療と介護の連携、生活支援や環境改善等を含めた多元的なケアの開発を行うことが求められている」と述べられています。その一例として、

- ・治療継続や療養生活を支える看護技術
- ・患者教育やリハビリテーションにより生活と療養を支援するセルフケア
- ・地域のリソースを動員し暮らしを支える在宅ケア
- ・地域のストレングスやレジリエンスを促進するためのコミュニティケア
- ・多様な医療・ケアをシステムとして繋ぎ、効率的に提供するためのケアシステム開発

を挙げています。このようなケアを提供していくためには、地域と病院を「つなぐ」スキル、多職種と連携し「つなぐ」スキルなど、多次元にケアを「つなぐ」スキルが必要だと考えられます。加えて「異分野との融合による戦略・萌芽的な理論や方法論の開発が不可欠である」と学術的に研究、教育を融合してケアを「つくる」ことも重要であると述べています。

学術大会の基調講演では、杉下智彦先生（国際協力機構（JICA）国際協力専門員、医師）から発展途上国への支援において、看護専門職とどのように「つながり」、どのようなケアを「つくり」出しているのかをご講演いただく予定です。また、教育講演では、上記分科会の委員長を務められた太田喜久子先生から「多元的ケアの重要性」というテーマでお話いただく予定です。シンポジウムでは、大学研究者、認定看護師、専門看護師などのシンポジストから実際の「多元的ケア」の実践例を紹介していただきます。

様々な立場で看護に関わっている皆様と意見交換を行い、より深く「多元的ケア」に迫っていきたいと思っております。

引用 URL

1) <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t193-7.pdf>

聖路加看護学会理事長を引き受け7年が経ちました。当時は、私が聖路加看護大学に着任したばかりの頃で、田代前理事長より、将来構想委員会での取りまとめを拝見した時にはその任の重さに不安を覚えたものです。アカデミックな活動にはあまり力点を置かないまま仕事をしており、学会活動の社会的意義や、法人化の意味など、良く理解していないままの就任でしたから、理事会メンバーの強いリーダーシップに後押しされながら、何とかこぎつけてきた7年間であったと思います。

7年間を振り返って記憶に残ることは、会員数が570名から630名に増えたことがあります。会員数増は、常に本学会が抱えてきた課題でした。その解決には、「聖路加看護学会は聖路加看護大学卒業生のための学会ではない」というメッセージを多くの方に伝える必要がありました。聖路加がこだわり続けてきた「看護実践」の変革に寄与する研究を推進し、その技を普及する役割を持つ看護学会であることを自分なりに説明してきたつもりです。

また、一般社団法人化したことも大きなことでした。このために会計年度を半年ずらし3月末に改め、会計基準を満たし、そして法人化するという計画でしたから、あしかけ4年間はこの作業にかかっているということになります。途中、理事の任期を半年間延長したり、評議員選挙実施後に就任時期を変更したり、その過程は、最後まで定まらず、多くの会員の皆様にご迷惑をおかけいたしました。

紆余曲折でしたがおかげさまで、法人化を完了し、会員数が増え、次期役員に引き継ぎができそうです。今年6月の評議員会で役員交代を諮ります。そろそろ具体的な調整が始まります。今後とも新生聖路加看護学会をどうぞよろしくお願い申し上げます。

7年間の学会運営にご支援くださいましたすべての皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

お知らせ

★学術交流委員会

「看護実践科学研究の推進を目指し、看護実践の向上と看護学の発展に寄与すること」を目的とした「一般社団法人聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金制度」による2016年度助成対象研究の募集を行いました。応募された方には、近日中に選考結果を通知いたします。

また、今年度の学術交流会は、本年9月の当学会学術大会終了後に同日開催を予定しています。講師に臨床で学生や看護師の教育を行うクリニカル・ナースエディケーターとして活躍する方々を迎え、新人看護師やスタッフの教育・研修の話題を提供していただきます。現任教育での悩みを分かち合い、交流を深め、明日からの活力が得られるようにと考えています。どうぞ、ご期待ください。

「クリニカル・ナースエディケーター CNE と語り合うタベ」(仮題)

この交流会への参加は学会員の資格を問いません。また、参加費は無料、事前申し込みも不要です。多くの皆様のご参加をお待ちしています。(担当理事：松谷美和子、佐藤エキ子)

★庶務

- ・法人化して慣れない事務業務を担いましたが、会員の皆さまの温かいご協力のもと、無事に1年を迎えることができました。次年度は役員の大規模な交代があり、新体制が組まれます。皆様におかれましては、今後とも学会事業へのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。
- ・現在の会員数は660名(2016年1月15日現在)です。卒業式・修了式には、学会のご案内と入会のお誘いをいたしました。入会申込書は、HP「入会案内」ページからダウンロードできます。聖路加看護学会員は聖路加国際大学の図書館を利用できるメリットがあります。ぜひ、近くの方の関心を誘い入会をお勧めください。
- ・4月は異動の時期です。皆様の勤務先や所属、住所などの変更がありましたら学会事務局まで速やかにご連絡くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。事務局へのご連絡は郵便、FAX、E-mailのいずれかでお願いたします。(担当理事：森 明子)

編集後記

多くの皆様のおかげで第31号から本号までを無事に発刊できましたことを感謝いたします。次号から新たなメンバーになります。ニュースレターには看護実践を大事にする聖路加看護学会の歴史が反映されているような気がします。ホームページには第12号以降のニュースレターをPDFで掲載していますので、そちらもご覧ください。(ニュースレター委員会)

★学会誌編集委員会

聖路加看護学会誌は、年間2号の定期刊行を行っています。論文の投稿は随時受け付けています。オンライン投稿システムを利用して、投稿をしていただきますようお願いいたします。毎年1月末発刊号の投稿期限は前年の5月末日、7月末発刊号の投稿期限は前年の11月末日です。予算の都合により、次年度から、学会誌の総ページ数の上限を設けることが理事会で決まりました。また、英文投稿も増えていますので、国内外の文献データベースへの学会誌の登録を検討しています。その場合、聖路加国際大学リポジトリによる公開を中止することが必要になることもありますので、慎重に検討していきたいと思っています。(亀井智子)

★会計

日頃より当学会運営へのご協力をいただきありがとうございます。2016年度の会費につきましては、同封いたしました払込取扱票をご使用ください。過去の年会費の納入がお済みでない方は、併せて振込をお願いいたします。当該年度の会費納入確認後、学会誌の送付をさせていただきます。

振込先：郵便振替口座：00100-8-670371

加入者名：聖路加看護学会 です。

納入状況など会計についてのお問い合わせにつきましては事務局にご連絡ください。よろしくお願い申し上げます。

(担当理事：井部俊子・佐藤直子)

★高度実践看護開発検討委員会からのお知らせ

本委員会として看護系学会等社会保険連合(以下看保連)の副代表を勤めております。看保連では、次年度の介護報酬改定に向け、準備をはじめとしています。看護と介護の連携、自助・互助を促すための多様なサービスの統合がこれからの課題になっています。介護保険も一層複雑になりましたので、看保連としても介護保険の現状と課題をよく理解し、次の診療報酬・介護報酬同時改定につなげたいと考えています。3月28日には看保連主催の情報交換会を開催し、介護保険を担当する厚生労働省老健局の看護技官に最新情報の提供をお願いいたしました会員の皆様から介護報酬改定に向けた要望事項がございましたらお知らせください。

(委員長：山田雅子)